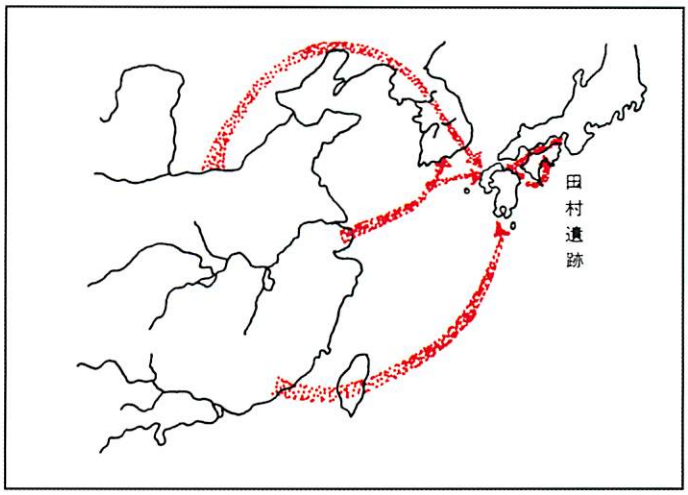
(3) 弥生時代の文化とくらし

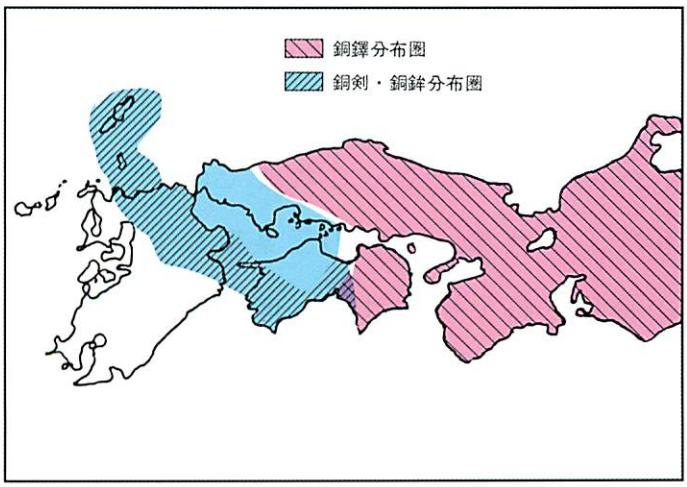
弥生時代の文化　田村遺跡群からは、多数の弥生土器をはじめ、石ぼうちょうや石鏃、たたき石、砥石、灰や木炭、土製の紡錘車などがでてきました。

弥生時代は、また、金石併用時代といわれるように、高知県下の各地から47本の銅鉾、10本の銅の剣、10個の銅鐸が発見されています。(1996年現在)

土佐の中央部は、北九州を中心にした銅剣・銅鉾分布圏と畿内を中心にした銅鐸分布圏が交差する地域であり、県内の出土のようすをみると、銅剣・銅鉾は、安芸平野より西の地域に、銅鐸は香長平野から東の地域に分布しています。銅鉾と銅鐸の両方が発見された南国市田村は、まさに弥生文化の二つの中心の接点にあたっています。

大陸文化流入の経路



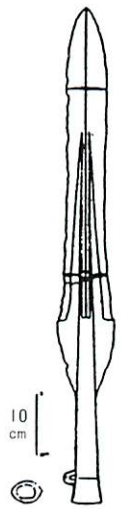


銅鐸と銅剣、銅鉾の分布圏

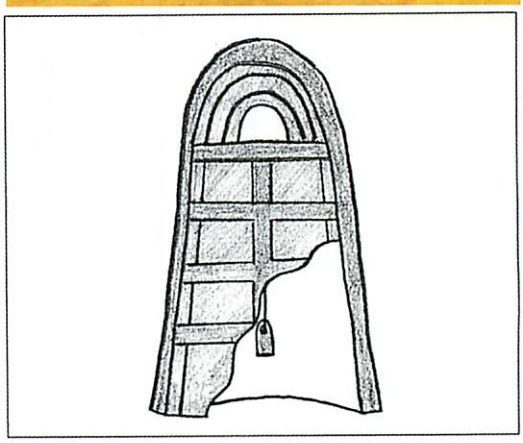
南国市内で銅剣は発見されていませんが、銅鉾は十市の遅倉で1本発見されました。中広形で、全長83cmで、最も幅広くなった部分が6.8cmあります。

初めのころの銅鐸は、つりさげ、音をならして聞いていたようです。1974（昭和49）年、南国市立日章小学校6年生の男の子が、田村西見当遺跡のはずれにある水田で、深さ約30cmの土の中から土器のかけら・石斧（石のおの）・石鏃とともに銅鐸の舌を発見しました。この舌は、良質の青銅製で、長さ3.7cm、最大幅1.3cmと、他県出土のものと比べてかなり短いものです。また、この舌は、全国的にもたいへんめずらしく、これまでに和歌山、兵庫、鳥取の三県でしか発見されていません。四国では初めての発見でした。高知県では、音を聞く銅鐸は2個だけで、それ以外は、美良布神社に残っているような、見る銅鐸です。

遅倉遺跡出土の銅鉾

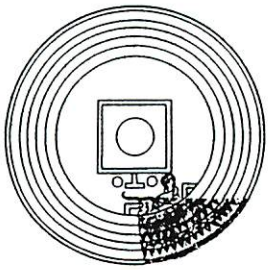


銅鐸の舌

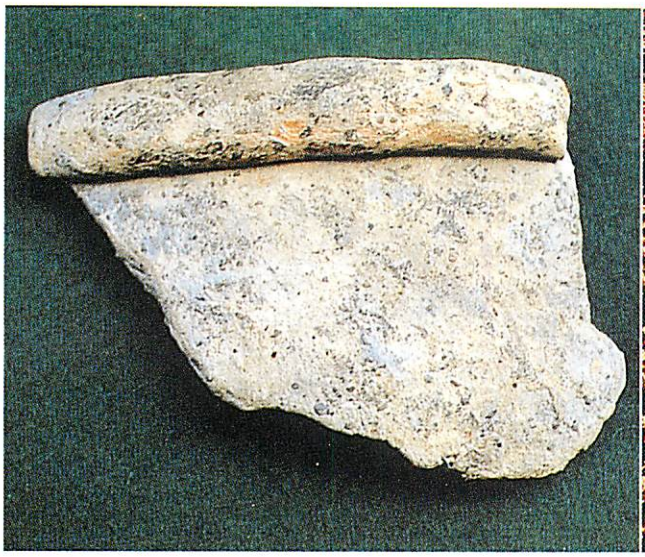


舌は、銅鐸の中につり下げて音を鳴らして使った。これは、祭りを行う時、音を出して神の来臨を感じるためのものだろうとされている。

また、西見当遺跡からは、朝鮮系無文土器や、中国（後漢）の方格規矩四神鏡も出土し、大陸の文化が中国大陸・朝鮮半島を経て日本に伝わってきたことを物語っています。文物だけでなく、あるいは人の移動もあったのではないかと考えられます。



鏡の復元図



朝鮮系無文土器

方格規矩四神鏡

龍河洞でくらした人びと　香美市土佐山田町の龍河洞遺跡は、美しい鍾乳洞をもつ観光地として知られています。洞穴の出口になっているところに三室からなる住居跡があり、ここからは、20数個の完全な弥生土器が発掘されました。

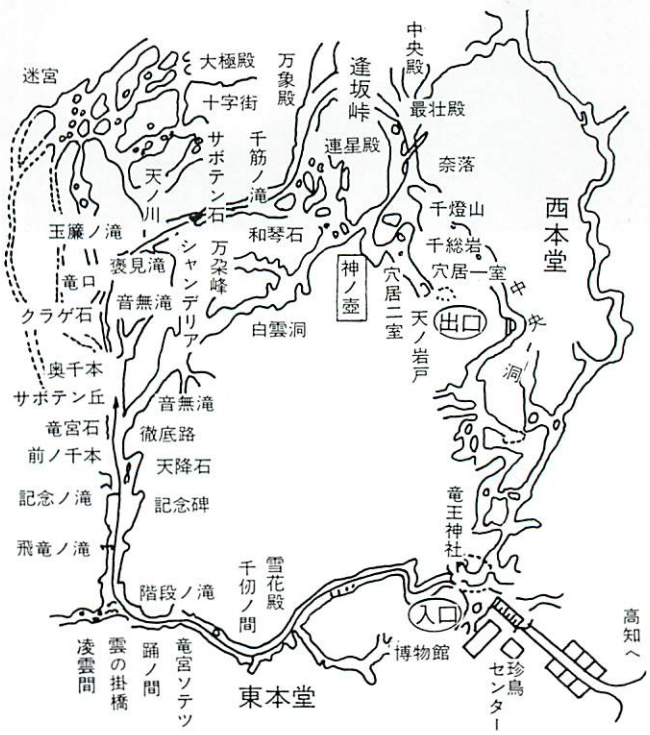
第一室からは、後期弥生土器、貝の輪、しかのつので作られた装身具、石錘、鉄のくわ、けものの骨、貝類、木炭のかけらを発見しています。この部屋は、居室であったと考えられます。

第二室には、石を積み重ねた炉跡があり、石灰石の棚状になった場所には、弥生土器が数個おかれていました。このことから、この部屋は、炊事場、物置場として使用されていたと考えられます。

第三室には、「神のつぼ」と呼ばれる石灰につつまれたつぼ形土器が岩の間から流出する水を受けるようにおかれていることからこの部屋は、水くみ場・調理室であったと考えられます。

龍河洞の「神のつぼ」

この遺跡に住んだ弥生人は、どのような生活をしていたのでしょうか。穴居面積から、およそ10人前後の人たちが住んでいたと思われます。また、犬の骨が出土していることから、そこに住んでいた人々は、狩りをするため、猟犬を飼っていたと思われます。そして、各種の貝がらの出土から、山の幸だけでなく、海や川の幸をもとめて出向いて行ったものと考えられます。



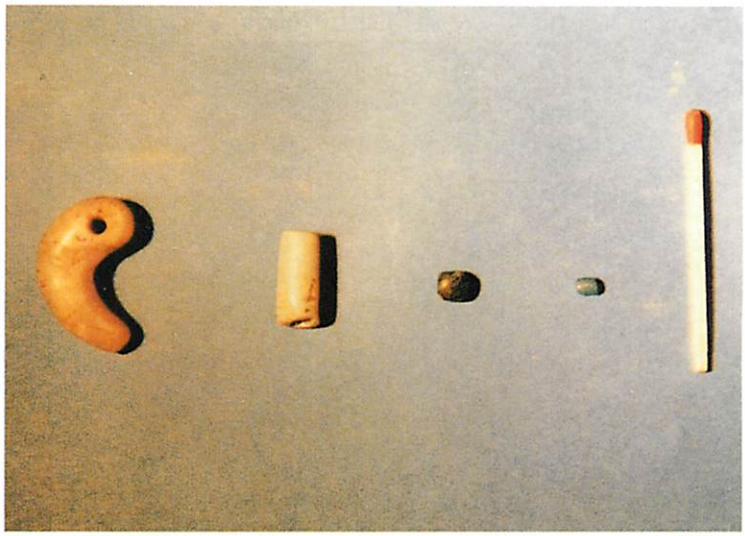
龍河洞洞内図

この洞穴に住んだ人たちは、どうしてこんな山中に住んだのでしょうか。多分、狩猟を生業とする狩人が、ふだんは平地で農業をいとなみ、農閑期の狩猟に使用したと思われます。

むらからくにへ　米づくりがはじまって、生活に関連したいろいろな技術も進歩し、生産力も増大しました。そして、その結果、人々の間に身分のちがいや貧富の差ができてきました。むらには頭があらわれ、むらとむらの争いから、小さな国が次々とできてきました。

弥生時代の中期から後期は、「倭国」が百あまりのくにからしだいに統一されていく激動の時代でした。田村遺跡群西北部の集落の住居跡からは、そのような時代を物語るような遺物も出土しています。戦いに使ったと思われる大型の石鏃や石槍、それに焼け落ちた住居跡は、あるいは戦災にみまわれたものと考えられます。

装身具



この集落から二片の方格規矩四神鏡が出土しました。集落の首長も、はじめは鏡に権威を託していたと思われます。しかし、住居跡や溝に投げすてられた鏡のかけらは、権威が失われたことを物語っています。これは、より強力な他の権威者に統一されたことを示すものと考えられます。